

平將門退治圖會三



13
3295
3



へ 13
3296
8

平將門退治圖會二 起兼平六年三月 至天慶三年正月 凡て四年也

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

第五

藤原純文南海小蜂起
附 紀淑人任國下向

兼平六年三月十日紫宸殿小宴。花の宴の淨庭あり。是ハ嵯峨天皇
弘仁三年二月。神泉苑小幸あり。花下小文人と云。詩と賦せし其文成
試とあふ。あまの宴の始ゆふし。世々の恒例とあり。きよ此日當参の人
大納言實頼中納言師輔参議在場。大江維時坂上経以少納言友雄
大内記師任。文章得業淑方。その外菅江の二家。南家北家の輩。清中の
あ流ゆきも劣らぬ。賢才の文人各その佳作を競ひ天覽小儀。下。是聞耳
目と駭うし。その與頗る濃やあり。活らぬ伊豫の國の脚力到着を。その

卷之二

一

状のいり。當國の任人伊豫藤原純友山陽南海西海の海賊と詔らひ
 見よ。千餘艘の船と懸。津く浦くと横切。甚ぐ狼藉及ぶ。是の依て海上の
 往來絶んとする。當國の目代河波頼俊の与力と云く。去月廿八日
 こと後制。賊徒二千六人と討取と云く。彼が共黨一万人の依りぬ。其
 威勢當りば。捕獲せよ。大事及ぶ。公卿會議あり。早く國司下向あり。逆討あり
 ま。彼を以て。書さる。かくて公卿會議あり。謀政忠平公命せ。其
 去る。兼平二年。南海小賊蜂起。伊豫の國の任人小野氏彦等。礼坊と云く
 の間宿軍と以て。是と鎮む。同四年。亦群賊蜂起。依て。兵庫元在原相安
 と以て。海賊と捕へ。多。野靜謐。及ぶ。其の如く。今年蜂起の各。定めて。その
 除黨あり。遠回の國司と遣へ。その乱運と鎮む。其に。擇む。其の
 從四位下式部少輔紀淑人の文武の才世の許。是。伊豫守小野下木早

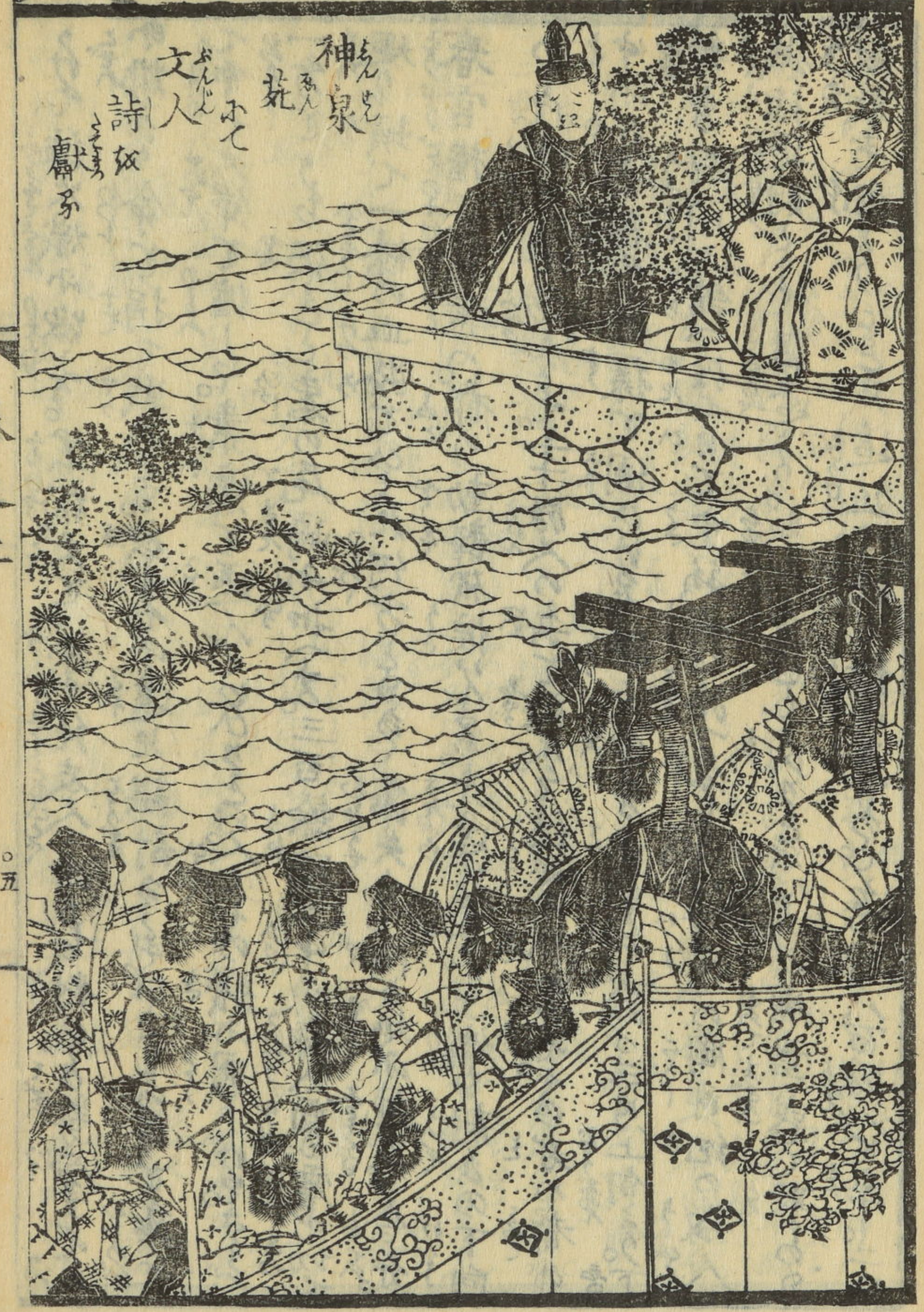
下向く。賊徒と鎮む。其のあり。仰下。さ。淑人面目と施。津前。我退
 去。入。合戦の用意と急ぐ。指と作せ。鐵と砥せ。二十余日と經。用意
 全く。四月十二日の早。且。都と立て。同十六日。渡海の順。同。伊豫
 の國。と。解。望十七日。播。別。明石の浦。小。着。東。雲の明。や。小。霧
 さら。船。暫。時。船と。駐。あり。沖の方と。見。渡。せ。次。小。暗。朝。霧。小
 間。より。見。あり。数。多。の。兵。船。種。く。の。旗。と。立。隊。伍。と。乱。さ。船。懸。せ。え。あ。と。敵。よ
 ぎ。ん。多。と。と。交。束。と。解。て。待。子。さ。小。彼。兵。船。の。中。より。く。小。舟。一。艘。懸。と。と。此
 方。と。さ。く。漕。舟。と。六。人。が。執。事。常。監。守。船。の。舳。先。小。舟。と。て。そ。と。が。密。子。を
 竊。ふ。と。名。時。の。間。小。舟。方。の。船。の。間。近。く。漕。寄。と。あ。り。明。石。へ。出。張。と。る。伊。豫。の
 任。人。氏。彦。が。使。の。者。小。舟。あり。折。今。夜。純。友。の。共。黨。一。千。人。今。朝。家。と。傾。け
 来。り。ん。との。事。小。舟。と。一。旦。の。催。但。小。隨。ひ。与。力。と。云。く。純。友。息。願。の。者。も

ありし時の威勢止る多し。命を貸らん満ちたりしに幸ひ國司の山下向小
 倉仰き頼むを各々一命と依けり。一竹懸命の地と下し預らんぬ於
 て争り國司向ひなり。ちて引夫と幾人其海路と遮らん。あの後許容と
 蒙りしと。懸懸小演けし。守國向くところ笑ひは。朝の猶も一理ある小
 似しと。既小賊等小共力して。國司の南向と止ん。あふ出張りし。あつら
 夫の一筋も射りし。速小降参る条。全く儲りし。あつら。然し。常小知
 と池を思ふ圖小引寄て。捷と撃人の討救あり。假令餘人の欺くたあ
 守國の欺き下。と大音聲小響りし。賊の頭と拒平張伏て再三再四の
 如くふ言り。情の事の虚妄あり。身の天雷小打碎。余落へ沈む。あつら。一
 天地神明と誓ふ。努備小少せ。と餘儀あり。小音をふ。あつら。淑人等と
 引あひ實小誠。覺りし。別あは。許容あり。當る小属と軍忠と一。あつら。

勲功す。恩裁の。い。あつら。と。あつら。使者の。始て。あつら。打飲びて
 艦艇と廻り。その本陣へ。飯り。津。あつら。後。聊も。遮る者。の。あつら。六
 海上。の。障り。多し。同二十日の暮。あつら。伊豫の。國へ。着。あつら。翌。あつら。廿一日の夜。あつら
 ま。五更の。比。及。ふ。紀。淑人。の。千六百騎。の。勢。を。率。し。津。の。濱。と。打。ま。んと。あつら。ひ
 ける。あつら。向。ふ。より。勢。の。程。二三百騎。馬。煙。を。ま。て。馳。来。る。淑人。と。あつら。我。禮。を。す。あつら。敵。と
 備。と。ま。と。と。下。知。あつら。間。近。く。あつら。あつら。信。と。あつら。是。あつら。敵。あつら。あつら。あつら。當。國。の。目。代。橋
 遠。保。あり。淑人。馬。と。控。あつら。あつら。遠。保。馬。上。あつら。式。代。り。あつら。去。り。あつら。二月。當。國。の。別。宮。小
 勝。負。と。決。ま。る。の。処。味。方。の。利。あり。あつら。あつら。暫。く。山。林。小。隠。と。忍。び。あつら。國。司。の。下。下
 向。と。相。俟。の。中。就。敵。の。城。中。へ。忍。び。入。り。あつら。敵。の。櫓。と。窺。ふ。將。驕。り。士。率。急。り。
 軍。の。備。あつら。あつら。あつら。則。大。多。あり。あつら。勢。と。向。ら。し。あつら。某。へ。搦。手。へ。廻。り。一。時。小。責
 落。さん。の。踵。と。廻。ら。し。あつら。あつら。淑人。大。小。喜。び。あつら。味。方。の。物。

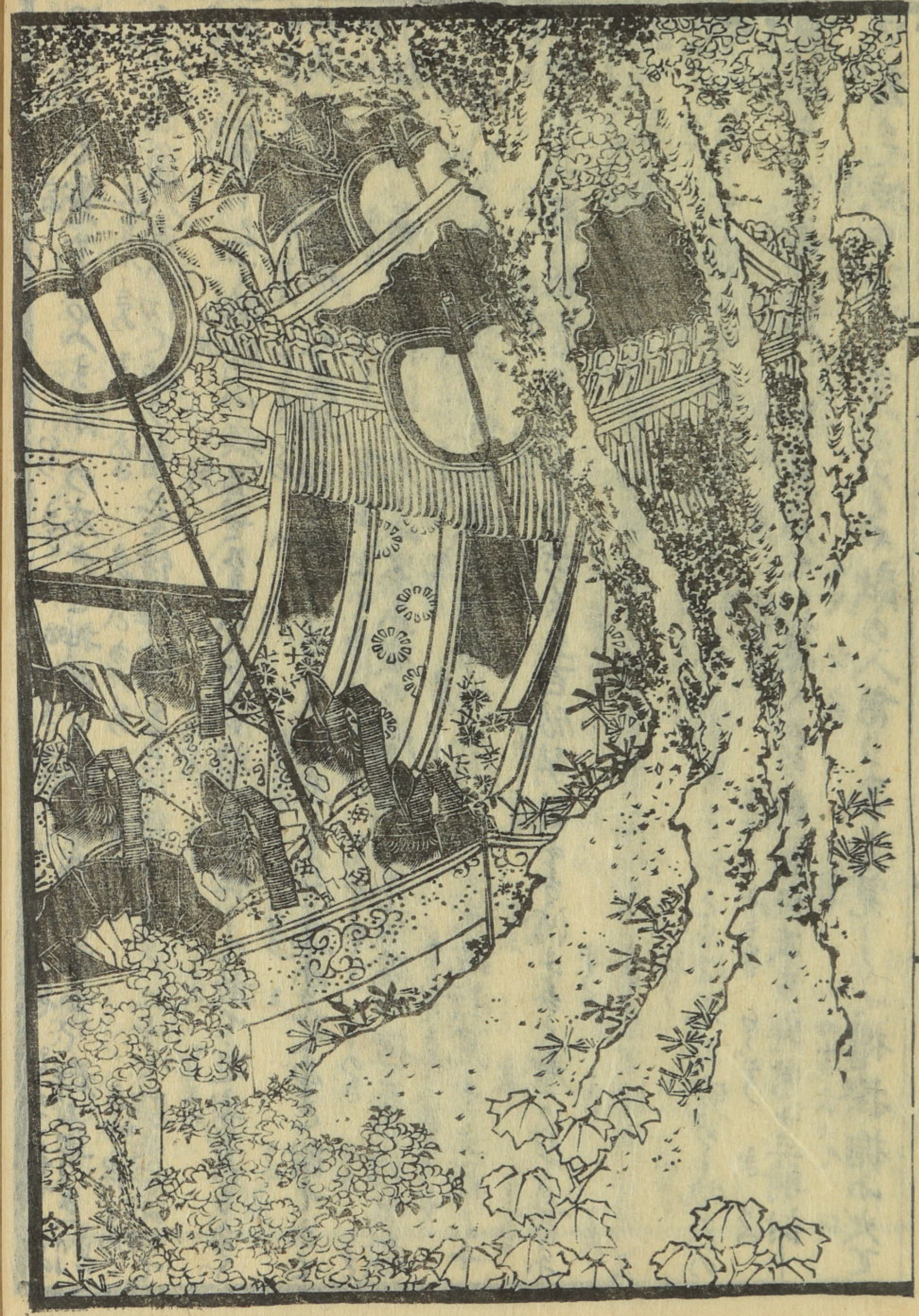
多しといふども不知素因ある者ゆて影護ありし小早速の未着まづ以て飲び
 思ふ知あり。斯て異見の軒の如く其理きたるも然るの旨も後ふだに
 こそと勢のうち物馴る兵士百二十騎と分ちて遠保小属らとける。かくて進
 らぬ搦手の相圖と定め。出陣わらわ小純友の當國高純の城小在ける。明石の
 沖の氏彦等後差向ま六都の勢。雲霞の如く小寄る。彼澳の城んと
 思ふのうら。この城内も然るも用意の計も多。日毎酒宴と催ふ。明石の
 沖の音信と奈何のわらんと後知小思ひもろ。淑人遠保都合其勢千八
 百餘騎進な搦手一同小縣波の声を揚し。六城中周章と度と失ひ防んと
 まる義勢のあて。此彼小二十人二十人の寄合て。逃準備とす。このとき小純
 友が腹心ある伊賀寿太郎同次郎の兄弟。との在さる。大音揚言甲斐の
 奴原も加る臆病ある所存もて大依小共まる鳥辭の者。そ我くが働の位と

視て同じ覺せしゆ。小一の本を押し開く。鑓と並べ、駈出に群る寄手。別
 て入り四角八面も切て廻り。當を燒陸薩ま。須臾め。二十七騎矢庭も切て
 馬より落し。二十餘騎小疵負せ。その威勢小恐怖して敢て進寄りのもあ
 只其四方で遠巻し。矢續けて射きめり。純友とを遠小をわと討せ。と
 下敷とあり。其身の精はの大は小雲系威の澄着て。一丈有餘の檜木の標旗
 之通り出る。舍并右門。純兼同四郎純正同七郎大夫純行兄弟主進。二十
 七騎も不統て駈出。一方の寄手五百餘騎除き。海をまと聲をひて。真中
 進取勢。塵小せん。共ゆる。伊賀寿兄弟とををを。勇氣と勵む。右と
 撃て。たりを廢け。堅橋小菟ま。純友小勢も。必死と究め。勢ひの
 稟然とあり。難く取次小成て。退く。その戦ひ純友の郎等十三騎討
 け。後ろ城の方と見え。敵の入替り。ちと覺し。櫓搔指小火と



卷之二

五



卷之二

けり。猛火熾小坂より。黒相天と集も純友人くみちち討ひに効力勞して且
 小坂より。命を捐て戦ふも。惣もその遠に謀討るも。ひまのらと落延
 てきて大軍と催し。素意と遂んといひまゝ人々その議小町下り。まゝ
 一方より破とて東の尾崎小坂へ。三百餘騎が中。小縣入面も震切
 廻り。頓て一條の血路とひくは何方とも多。落失す。活るは純友が舎弟
 春宮権亮純素へ。都の動靜候はん。先達と登りし。備も討まの南向
 わる途申も防んと。三千餘人の兵と遣え。彼処小坂を死ん。その身へ都の
 中。小坂に。密にその様と伺ひけり。諜ト命するのむ。三月月上旬より。下
 總多將門の館へ。住て日と重新。再び路へ来て。因り伊豫の國。利紀の淑人
 賊徒。追討し。渡邊より。出船。ゆして。因り。心大。周章。惑て。取もの
 取敢。跡より。追近。扱。討。その場。八百餘人を率。二十

除艘の小舟小舟。風波の順逆も。後まを。曳声。推。四月
 十九日の曉。瀬波の國箱の岬。小着。あ。軍の。分。定。十
 艘。陸。小。舟。舎。弟。八。郎。純。業。と。大。將。と。し。て。瀬。波。路。と。經。て。搦。手。へ。發。向。さ。せ。
 その身へ。捕。も。急。ぐ。津。の。濱。より。上。り。こ。し。て。向。ふ。方。と。見。こ。せ。其。海。の
 面。三。町。を。馬。の。懸。場。と。強。し。や。搦。指。と。搦。送。前。本。と。し。て。ゆ。へ。方。の。ま。な。へ。
 宿。軍。小。紛。ま。は。業。内。も。知。る。ぬ。京。家。の。奴。原。悪。所。難。所。小。追。討。て。討。取。と。ん。
 の。微。妙。と。ん。と。あ。り。四。五。町。隔。ち。海。郎。の。通。る。徑。より。ひ。く。こ。と。より。なる。抑
 ら。小。陣。取。り。淑。人。が。舎。弟。あ。り。左。衛。門。佐。淑。方。多。り。淑。人。遠。慮。と。廻。り。か。の
 明。石。あ。り。降。参。あ。り。尙。詐。り。て。宿。軍。と。追。討。小。事。申。り。わ。と。ら。小。舎。弟。と。遺
 棄。て。その。備。小。做。せ。り。か。る。権。亮。純。素。の。舊。地。小。兵。と。進。り。搦。指。の。邊
 ま。で。推。寄。り。懸。波。と。は。と。揚。ま。は。宿。軍。一。周。小。懸。波。と。命。し。て。夫。叫。び。の

音天地と震の砂相とまゝ挑と戦ふ。賊徒強くと。倭方が幸大
 の不亂も防ぎ悪くぬれん。純素の勝ふ事。横無尺の免まはる。宿軍の
 度と尖ひ南とさして引退く。情の揃ひ廻り方。八郎純業の豫て期し方。相
 圖の時と差へんと。益疾と分る地。軍勢大半歩まき。適馬小宗
 方の驛馬と奪ひしめき。同下所と通る心地。道へ多く果敢る。漸小
 きて九日の。年刻の瀬及小高純誠の揃ひ。や近付て仰向まはる。黒煙り天と
 覆ふ。まへに追ひの軍始まら。相圖の標りごと心得て直くと。純素は難波と吐
 を揚る。折し由紀淑人の高純の城の焼跡。まはる負生捕の敷と記。或ひ
 討取処の首とめて。實檢と在りける。揃ひの方の難波の事を。返りも波野
 右門五勢五百餘騎と一所の圓。八郎純業が三百五十騎と中。把持て一人の
 勝とと揃ひたり。純業元来若武者。て奮然とる威勢。射まとの

切も輝そのせき。面も震ぞ戦ひまじ。味方へ長途の勞と。且つ其の
 兵多く。波野が五百餘騎。小免まはる。辟易とせん。如小流矢一掃
 為来り。八郎純業が胸板。小免とせり。急所の痛。小免と。急
 真倒る。小馬より。落ると。波野が郎。即首と。揃ひの固。未
 鳥合の軍。戦ふ。あま。張る。方より。勇氣。馳。迷。足。まて。四。度。路。を。波。野。野
 急。小。退。駈。て。波。野。の。切。伏。難。伏。餘。ま。と。追。ま。る。小。純。素。の。津。の。淡。の。軍
 小。勝。て。威。勢。小。宗。ト。高。純。城。へ。馳。ま。る。逃。ま。る。味。方。小。隔。て。り。と。進。む。の。自
 在。ま。る。波。野。野。軍。勢。揃。ひ。支。ま。る。支。ま。る。力。あ。け。ま。純。素。の。餘。方。多。く。津
 の。淡。へ。引。返。す。小。免。小。宗。と。落。り。多。く。あ。ま。於。て。四。中。暫。く。を。兵。小。復。し。紀。淑。人
 が。勲。功。で。賞。給。ま。る。へ。あ。り。け。り

第六 大地震并 闘雞

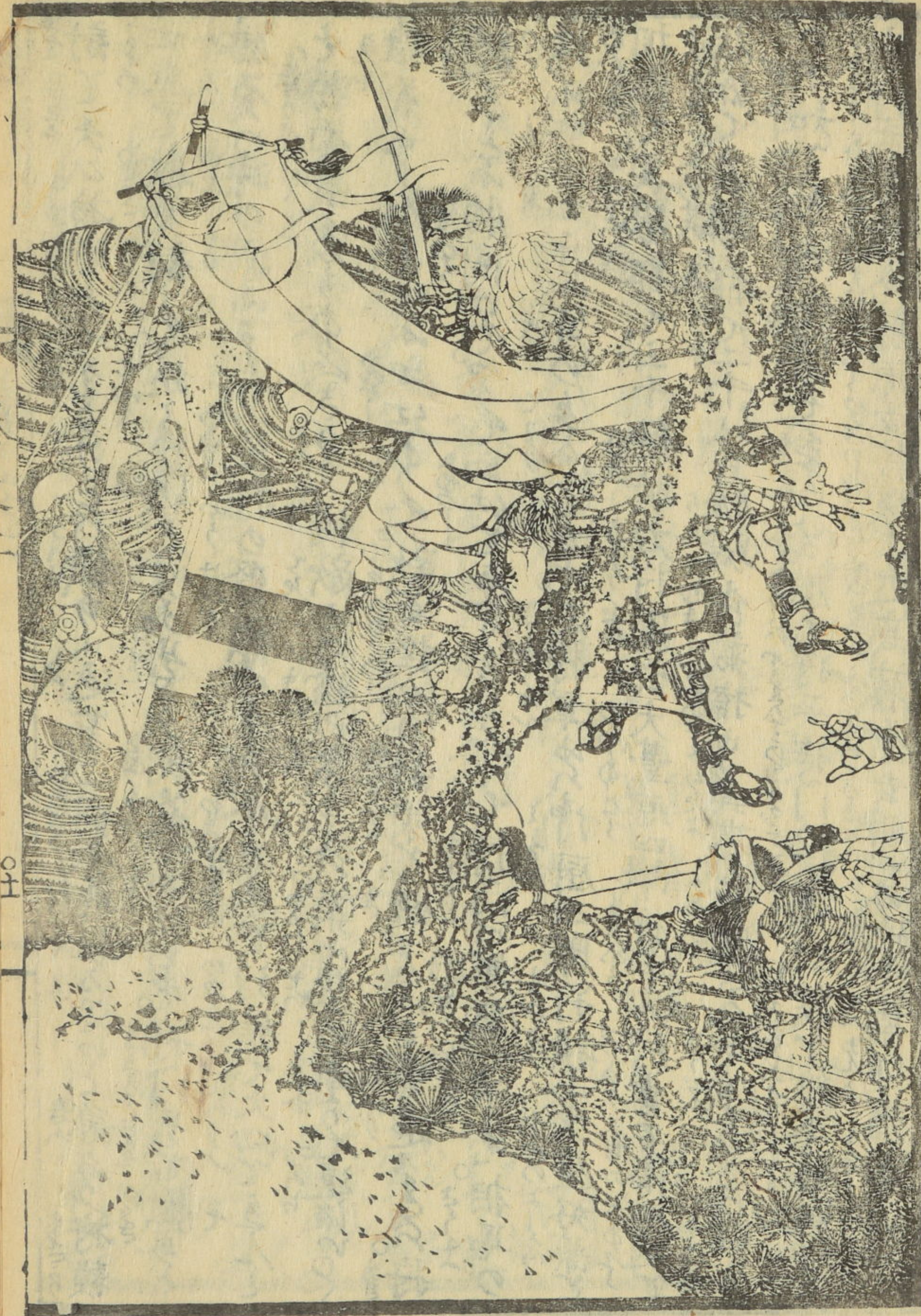
附 平将門蜂起所々軍

話説兼平七年四月十五日大地再騷く震ひて同廿九日益夜兼食と
 少敷と初を老少街頭ふ叫び人路と去敢ぞ今や坤抽も碎けて長利の底
 小澤んくと安き心もありけり。跡ふお夜雪星頭へまて。その光り月より明りあり。
 陰陽寮是と奏して九を雪星見へる。國の不祥多。その光り小立の等あり。ま
 色蒼さる。王候彼とて天子兵革小若しむ赤きと久の凶賊起て國人安堵せり。
 黄あつる。女色害とあも白きま。將軍叛て二年小兵乱大起る。まき水精
 ろて洪水の憂あり。今回の雪星。その色白く。心り。二年とせり。武臣王命
 て月ま。兵革大起る。最重き。ん懐多。慎と奏し。六。諸社諸寺小課
 せ。山行待とも急ら。修せらとける。お小其比。京中の老君貴賤と。虎鬪
 雞と弄ぶ。法小過。是。例奉。二月。四。禁裡。い。雞。合の。符。會。の。是。を

量の見多。適弄ふ。あり。と。面。白。き。る。小。思。ひ。く。次。春。小。の。事。騷
 ち。お。小。五。十。羽。或。ひ。の。十。羽。を。扇。を。多。く。四。本。柱。と。建。土。俵。と。備。文。之。用。小。是。と
 儀。構。を。その。の。装。成。時。の。綾。羅。錦。繡。と。以。て。雞。の。衣。裳。と。し。遊。九。の。太。く。逞。ま。を
 求。り。金。銀。と。黄。を。の。小。む。む。ぞ。致。へ。ま。を。氷。り。子。て。他。の。雞。と。奪。ひ。掠。り。果。小
 へ。争。論。と。費。中。て。液。間。敷。の。恨。り。は。怒。り。の。時。田。一。反。と。以。て。一。雞。小。換。り。ま。ま
 按。む。る。お。今。著。聞。集。ふ。云。兼。安。二。年。五。月。二。日。東。山。の。仙。洞。あ。て。雞。合。の
 事。あり。り。公。卿。侍。從。僧。徒。と。下。の。小。面。つ。子。小。祇。候。の。の。ど。も。丸。右。と。ま。ま
 小。丸。の。方。頭。内。藏。頭。親。信。朝。臣。右。の。方。頭。右。近。中。將。定。徳。朝。臣。多。り。
 云。云。丸。右。の。鳥。岡。時。小。持。衆。を。ま。き。り。を。お。り。を。す。ま。い。ち。あ。方。の。名。を。持。衆
 多。く。南。滿。の。間。の。老。の。子。小。く。一。考。左。將。門。督。の。鳥。字。を。丸。右。左。少。將
 盛。頼。朝。臣。持。衆。を。衣。ひ。東。大。納。言。の。鳥。字。千。与。丸。右。少。將。雅。賢。朝

飯りし平二心ありあり。當座小謀をばり。狐歸一遣一念をば。然るにその
信ふ意なきをぞ。先諸方への教向と罷て渠と謀せんと有るをば。是れ高小
言るをば。一坐の人くばと搦へて。と山疑をゆらぐ。正しき止疑族を在りて。ま
て異心のゆき。狐疑へ過多き。書中載りけり。この入付門を引せむ。
大友の皇子が右例とひた。紀伊の光勝が先見と稱へ。既に心を決しけり。
衆議まことと一決あり。常陸の國香と貴んて。その準備嚴重あり。去程
小島住の急ぎて父の居城あり。常陸の土浦へ馳駆りて。下総の將門と。遠敷
の企あり。尚退治延引せむ。大寺小及び出。この入付國香の大小該も思ふ。あ
珍事あり。親しき一族の謀謀と。因りて。國朝家へ對しての不忠あり。人
の苦とあり。事の微あり。ち殊せせん。國家の災害とあり。去来や。軍勢
と懸懸し。この所々の家人と。燈ふまふ。この城のふも。境と隔る。この

先らば。指石府中中村守。悉く赤芝藤代等と。其の都令十と。百餘騎
折しも。長男と。上平太貞盛。在る。二男。兼任と。男。兼任と。
兩大將とあり。兼任の五百餘騎と。卒て。志久野。津と。取。兼盛の五十餘町
引下りて。勢と伏せ。敵の來りて。待。蕞。斬て。將門の弟。津三郎。將。旗
のふと。進めて。來りけり。兼任が。兵。志久野。不。屯。ま。る。と。て。案。の。外。小。營。し。
どの。敵。の。僅。の。小。場。あり。踏。破。つ。く。打。通。して。透。間。あり。切。て。か。る。兼。任。の。諸。卒
と。勵。し。或。の。敵。ひ。或。ひ。も。り。て。北。の。り。五。十。餘。町。す。敵。の。色。め。た。を。進。近。て。討
取。と。備。へ。て。亂。して。進。馳。る。思。ひ。の。あ。ね。横。合。あり。兼。盛。が。伏。兵。思。ひ。を。出。失。合。依
作。つ。く。敵。の。小。射。あり。將。頼。が。兵。射。あり。ま。ま。ま。と。て。陣。場。と。て。互。方。折。しも。兼。任。が
五百餘騎。矢。度。お。把。て。飯。一。合。せ。周。の。登。り。多。如。く。小。打。て。か。き。兼。盛。が。旗。八
百餘騎。將。頼。が。後。へ。廻。り。引。罷。ん。で。責。重。し。く。愛。お。於。て。將。頼。の。い。く。防。ぐ。地。



〇士



ひさしのあまのうらふら
常陸大塚國香
將門の弟
將頼
合戦

卷之二十一

原の四郎将平。五百餘騎と一山とあり。下瀬と渡りて喚て蒐と六村岡立郎
夏文。五百餘騎を遣り合。暫く戦て引退く。二番小津厨三郎将頼八百騎
もその願とあり。後と六平太夫維幹。合せて小利あり。三番
任をふたり。追の返りの戦て互陣と引つ。六将頼が郎等。八百餘騎を
討とける。又より兩陣入乱と大差と殺す。奮撃突戦中。別の後まで。千餘
箇度の戦ふ。人馬共小瘦とけ。六軍と圍く。互引遠等と燒く。折へり

第七 常陸大掾国香最期

附 下野の国司出奔

聖皇十一月十四日の。いさ。五更の頃。及より馬の足撥と平めり。あ陣互入乱れ。敵
霍翼。あはれと。さ。味方の長蛇。小立列。孫陽。小用。き。深。小。因。一。性。一。素。飛
雲。從。横。无。盡。の。闘。へ。は。と。間。ゆ。り。も。と。え。ぞ。さ。あ。陣。の。痲。負。討。死。の。成。而。平。と

いひてある。藤代川の白浪も韓紅。後下り。小権守興世。陣頭小助蒐
出。由。ある。人。小。先。と。蒐。ま。は。と。六。と。可。惜。勇。士。と。討。つ。あ。夜。軍。の。利。と。失。ふ。り。で
一。軍。と。者。者。の。多。本。小。先。と。の。合。す。小。多。勝。て。と。百。餘。騎。雁。行。小。列。孫。の。其。海
法。司。と。二。方。勝。つ。あ。折。へ。中。割。て。入。る。法。司。も。透。さ。取。圍。と。奮。震。と。大。成
後。を。後。小。軍。勢。干。着。討。れ。は。と。六。快。な。と。綱。と。引。平。次。繁。盛。あ。と。成。り。と。傍。の。殺
藤。小。屋。竟。の。射。多。と。千。騎。ま。り。を。勝。つ。指。詰。引。結。散。く。小。あ。成。先。途。と。射。考。ま。り。
興。世。が。軍。勢。二。兩。敵。と。射。り。と。さ。ひ。り。は。後。得。う。や。意。と。切。先。と。搦。切。と。蒐。む。を。い。ひ。く
あ。し。ふ。な。る。は。本。陣。へ。引。返。す。當。下。將。門。二。万。餘。騎。と。一。所。小。集。め。湯。小。因。で。進
其。國。香。も。多。勝。と。法。司。因。て。即。是。小。向。小。今。と。も。西。家。の。存。心。興。廢。と。さ。の。一。拳。と
又。之。り。將。門。其。日。の。暮。東。の。相。地。の。淨。の。直。直。密。小。赤。絲。威。乃。澄。成。着。金
作。り。の。太。方。の。袋。の。皮。の。尻。鞘。と。け。鳥。の。羽。の。征。矢。善。高。小。負。の。村。邊。藤。の。馬。の。中。と

握り求思きて又守ありける。陸奥の荒物白覆輪の鞍あそぞそをうける。
 きて陣領の蒐出で澄浦張ら杖つた大音吉小言けり我十善の帝位を心小
 り。自ら斧鉞を把て万國を征討せんを。唯今進發せしむる処小路次を渡を
 常陸の大掾四番と云え。は叔侄の國を志し忽地怨敵の思ひを徹せ。その儀
 むく夫一筋のみで。えあへとの小舟の雁の羽の征矢きりくと忘るまり引後りく。
 鳴吻と切て放つ。あ小笠原の庄下司行國の大將四番と馬と並ぐまうり。その
 大事より先立て四番の夫を小塞のく在け。その矢少し。過る庄下司
 行國の艦の船板を射抜て後る。四番が妻の乳の下小矢長せめてまゆけり。
 行國馬より礮と落し。繞て四番も落んとせ。即從等う四番をかく本陣
 へ引取せ。すんや敵の色あそ。この程とそあ。將門の軍勢勇と進んで切て
 かる。平太史惟幹の二百騎馳せ。返り。大勢の中へ蒐入り。從横小

難をく七八夜が程戦ふ。其間小孫盛盛任父を侍けてまう。主浦の城へ
 引取見。この内急小進本ら一人も疎らに討た。ま。伏兵やあ。ん。く。衆ひ
 怖して長進せ。ら。み。於て土浦へ難く。退き。う。この。四番の大事の痛難れ
 ば療養届く。く。も。あ。若。息の下小子息あ。人。を。持。方。小。折。き。我。齡。六。十
 小。勝。り。朝。家。の。弟。小。一。命。を。預。り。ま。老。後。の。思。ひ。中。の。小。さ。然。る。朝。敵。其
 松。の。新。八。坂。東。八。箇。圍。の。忽。地。渠。有。と。あ。る。く。と。こ。を。死。期。の。妄。念。を。汝。等。
 所。不。義。と。存。せ。ま。生。遺。つ。る。郎。從。と。投。持。し。の。う。あ。の。山。林。へ。の。り。と。ま。を。源。一。く。
 頼。り。節。度。使。の。下。向。あ。の。兄。貞。盛。と。言。令。せ。朝。敵。と。亡。ま。し。亦。奈。何。あ。ん。の
 の。あ。り。た。努。め。命。を。損。べ。く。も。死。一。旦。あ。り。て。易。く。生。の。百。慮。の。内。小。金。一。の。あ。事
 ぶ。く。忘。る。ま。見。負。盛。下。向。の。あ。父。が。遺。言。あ。り。と。て。此。事。と。し。く。言。因。を
 べ。と。言。畢。り。て。其。息。も。も。吸。や。も。緯。切。う。嗚。呼。先。非。今。ま。の。小。悔。く

返りぬるるもども。繁盛が異見の如く。勢敵して防ぎある斯るものも有る。前
あまも前世の宥習ゆわ。と遣の御と後り。父が死骸と埋葬せし。大將
既の討とて。疎堂竟余。今も。教と小落共せて。八十騎よりぞ残りけり。
斯くの再び朝敵と控。いづれ討も。父が遺命の任。武藏相模の方へ
打振舞と属て。も。雙言とも。後をいけ。十五日の夜。本より。小溜小城。城
出ける。備。賊等。先と。渡るとも。あ。い。に。櫓。小。築。と。建。成。ひ。小。間。小
甲曹と。靠。て。い。ま。城。中。多。勢。を。蓄。り。し。体。小。款。さ。け。六。敵。の。さ。う。小。あ。ま。と。預
知。も。夜。の。明。を。待。た。て。將。門。自。り。之。方。放。騎。と。て。小。り。み。て。土。浦。の。大。名
掘。より。押。取。拵。懸。波。声。と。之。を。あ。む。る。小。城。中。鳴。と。静。め。懸。波。と。の。合。せ。ば
夫。合。の。清。と。り。射。出。さ。ま。六。奈。何。の。敵。の。討。策。も。と。唯。遠。春。と。て。預。り。け。り。
ら。小。安。房。の。國。の。役。人。長。狭。七。郎。保。時。の。頗。る。才。器。あ。り。の。あ。ま。六。城。の。併。と

と。と。討。策。の。ぶ。と。と。落。夫。方。の。必。定。の。揚。高。名。小。備。入。と。持。指。と。候。じ
ま。く。と。屏。の。昇。り。肉。の。動。靜。と。候。ふ。按。の。と。旗。を。う。り。と。彼。如。小。建。屋。で
人。一。人。も。在。ま。い。忽。地。裡。の。涌。り。入。り。城。中。と。廻。い。と。あ。ま。を。幕。を。う。り。小。筋。と。小。張
ども。寂。寥。と。て。人。い。あ。か。て。大。名。の。一。の。本。を。と。颯。と。閉。ま。と。ま。の。づ。ま。と。ま。の。や
と。色。り。味。方。の。軍。勢。保。時。の。名。と。揚。て。這。回。親。王。當。國。と。出。征。の。乃。向。ひ。あ。ふ
出。發。應。ま。う。と。ま。い。と。出。迎。の。あ。り。親。王。の。心。と。ま。い。と。出。供。の。人。と。出。入。の。あ。り
寒。氣。と。凌。ぎ。あ。り。と。戲。と。け。れ。諸。軍。勢。を。い。城。と。も。落。小。け。と。凱。歌。と
吐。と。揚。事。旅。り。と。候。じ。と。ま。い。と。支。より。下。野。發。向。を。あ。り。小。國。國。の。酒。下。野。守
頭。頼。の。折。り。光。燭。と。て。防。ぐ。ま。い。と。御。討。多。く。あ。り。先。と。後。を。折。り。と。勅。使。の。下
向。と。歩。く。や。と。小。諸。の。京。都。より。朝。敵。と。逃。伏。せ。ま。い。と。あ。り。と。國。司。の。衣。冠。と
改。め。て。庭。上。小。出。迎。一。別。座。小。着。多。小。舟。の。上。郷。言。け。り。今。度。將。門。親。王。の。恩。を

多岐の軍あり。當國(の)山下向早く兵を率ひて出迎へし。其の後
おのの奈何の故ぞ定めて具心で存せらるる。人選莫討多き。其の不日不謀
戮あまきあり。備無らば初使一同は陣へ奉りし。其の最重し。後けり。六
四司へ接し相遠く。何と養方術を教ふ。名十九日の暮程まで。其の心も着
まら。衣冠の下輝くと腹奏のええけり。更し恐怖の思ひをりて。ゆり返報
送る。執事入道傍に在り。信と股眼をうり。六四司へ忽地その意を曉
して。到着の外へ頼り。兼知はし。新痛の如くあり。遅奉り及び不審を蒙
り。限の思ひあり。敵条件の勅命を兼る。久し異候不及を。一族は相觸て
時日と移され。馳参り。と振る。ま。六虎賢。諫界の久し。肘を
張り肩を脅ぐ。眼を睜り。使の取らぬ。諸國司入道。その事奈何あり
べき。密に禱ひ。うける。將門叔父の國書を依て。威勢竹と破る。軍勢雲

霞の如く。今あまの微力にて。是れ小當ら。の鶏印の。啓敷と較ぶ。其の
然べ。是れ小當ら。不義の汚名を蒙る。進退の度と失ふ。は。と。ま。つ
他國(山内)の。時の至る。候。と。言。ふ。け。は。その。意。不。隨。ひ。取。り。の。も。取
致。其。夜。の。中。小。落。り。け。は。然。る。六。國。中。誰。の。と。も。な。ま。り。の。も。あ。り。し。く。六
將門。い。し。く。逆。威。を。振。ひ。上。野。の。國。一。打。破。り。高。木。山。へ。本。陣。を。居。多。依。經。明。軍
奉行。と。し。て。その。看。到。と。等。う。ふ。安。房。上。總。常。陸。下。總。上。野。下。野。へ。い。ふ。不。及。を。死
國。の。軍。勢。攻。ま。り。附。隨。ひ。都。合。十。二。万。六。千。餘。騎。野。山。も。ま。ま。ぞ。陣。を。張。り。方
六七里。少。少。の。間。へ。軍。勢。宛。然。充。満。て。互。列。し。る。劍。戟。の。日。小。映。ト。月。小。輝。と。現。小
武藏野の尾花が。末も。是れ。六。過。ト。と。ぞ。え。え。り。ける。流。り。ふ。は。六。將。門。の。心。懈
う。氣。緩。り。て。軍。事。へ。忘。れ。さ。る。か。如。く。只。管。酒。宴。を。奉。り。多。時。へ。興。不。棄。ト。
眉。目。を。女。と。集。會。し。酒。宴。の。席。を。賑。は。せ。り。と。い。ふ。は。さ。が。他。討。り。て。その

機小入んと阿り詣ふ國々の國主郡縣の地頭等人の娘のいふ及む或の妻妾
の差別の容兼しき婦人と捕へて或の五人十人等此処彼処より騷るるを
金補額額で飾せ翠裳の粉を粧ひて床を争ひ座中小充綾羅の裳を纏ひ
頻りの青と赤の袂を音曲の益疾と分るる現由の秦の阿房宮小宇の
宮女を感愛せしその往昔も眼赤小思ひ出らる計り多し其深窓小類れて
堂の殊頭棟の瓦と暮らり一殺子の中を隔りて未しもめて飽ぬ支拂の契
ごも國司の命地頭の竹葉引引利とて万妹脊島音との鳴り多りけりかく
人望の背まきける將門が一期の奸悪日月のまじり地小墮あが今中廻り来ん
と心ある人の嘆きとや

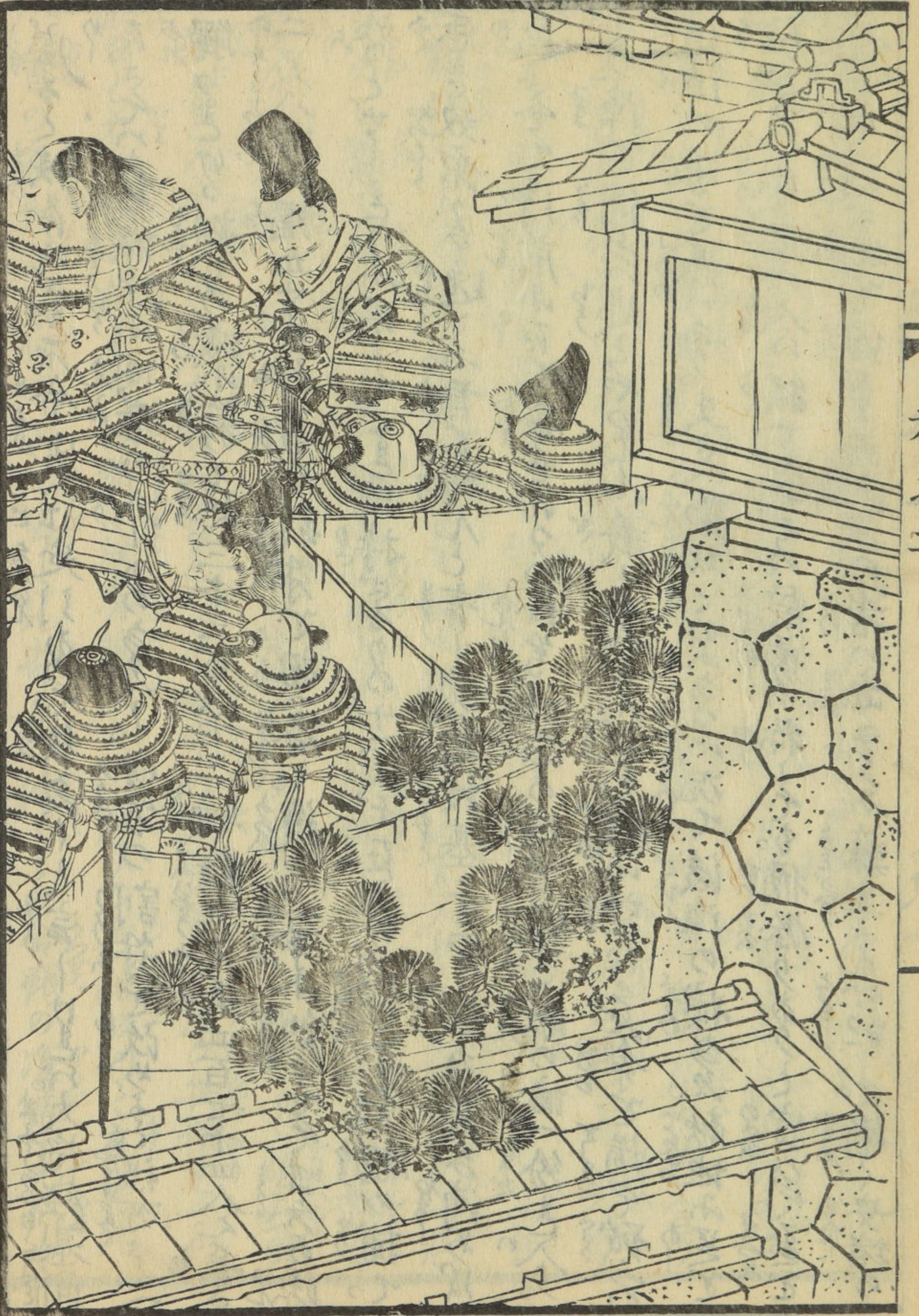
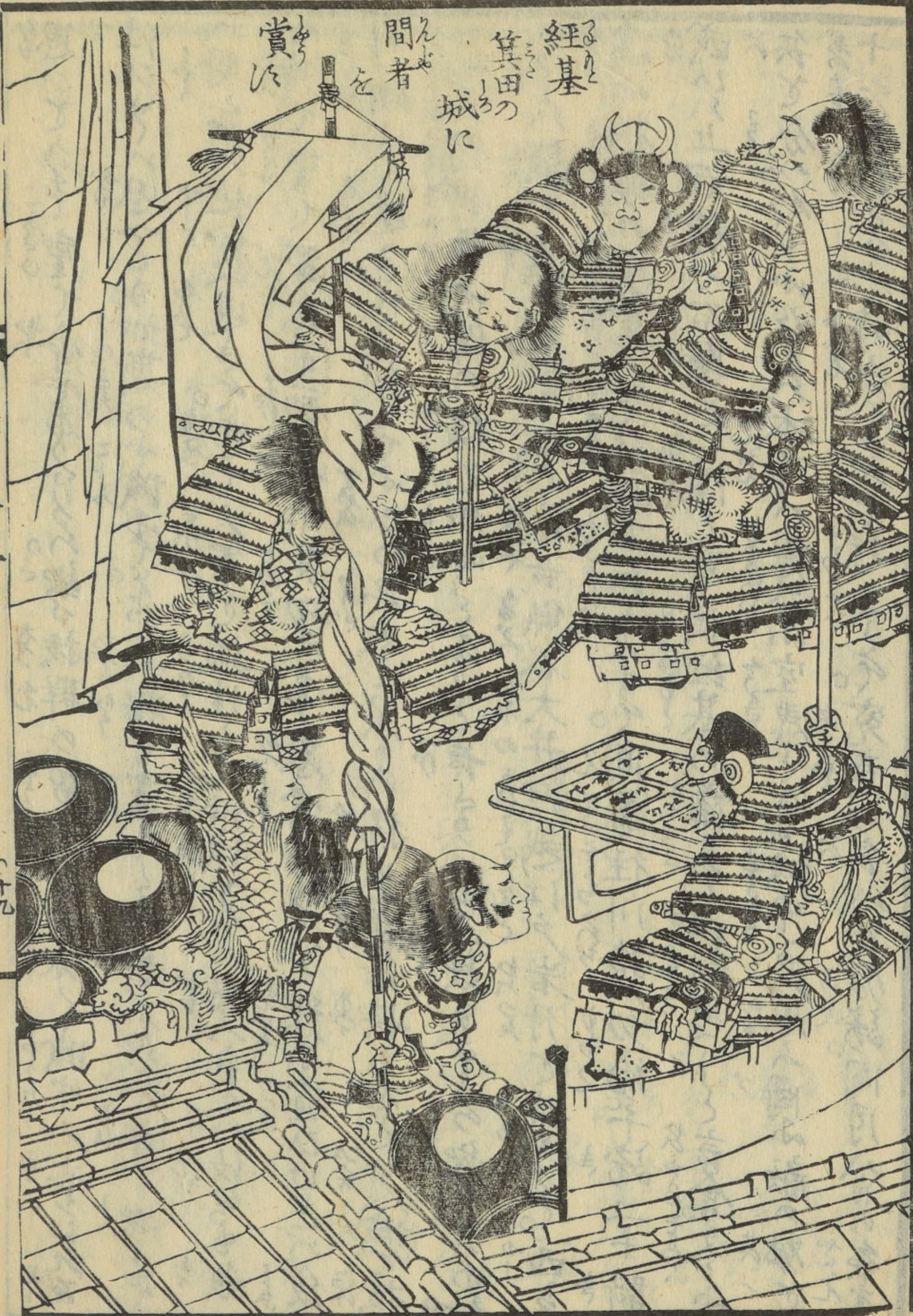
第八 经基王箕田籠城智謀

附 箕田の城再度合戦

六孫王源経基の去ゆる美平の頃より武藏守と爲て當國箕田の城小在りけり
去月中旬土浦合戦のよとて其國香の後然とあるふとて既小進發ありけり
同十五日落城小及び中國えけり途申より引取し重て軍兵を催し
將門と進發せんと議せられける同廿日比より風氣身を犯し起居候
さりけり心あるも黙止ささるる十二月二日將門の舎弟大葦原四郎將平
二万餘騎を引率し箕田の城小押寄り十重六重小圍り城中國東邊に
奉も期しるるあり些とも強がを靜りてのく居りしに其寄りの抱て多
勢多り箇程の小城を一搦小搦落せんと悔りて責準備もせび共々八方より
押寄りし時分のよれぞと城申の八方の高櫓より射をて極く差發し始
速由のちを射出さるる風小從ふ雨小似て指も濫も屯びて麻負死人の數を
初る遠く小引退くささるる寄りの大勢も亦も荒々として入智り責するると

急あまを。城の中にも射を入る先の如く射あまを。迎射敵あま大
 石を擲りて。微塵とあま。以上二百。其間へ息を継ぎ責まを。城中新屋
 なる急も。責徳を。一先陣を圍めり。城負討死を等ふる。九千五百人あ
 斯て。士卒の損ぶるの多し。其功あるべし。と多治の経明思按と。對城を
 構えんと。その準備と急りけり。経基あまを。圍み。尙對城と構えられ。味方
 甚難儀と。密に五十人の兵を擇み。敵の陣へ紛れ入り。對城の出来。是
 さら火を懸て焚き。その相と相圖として。一様採り責る。寄及張悉く
 挫ぐんと。その討と設け。同月七日の未の刻より。雪霏々と降ゆ。屋上嵐
 の強なる。今宵で。屋裏の夜あま。とて。城中の兵。甲冑を。澁ひ。兵糧と。つ
 酒を。呑て。相の揚を。淡新。林喜藤太と。忍びの者。池飯。い。言を。言
 今宵の夜討と。奈何。中。けん。寄々の陣。と。合戦の準備。と。今や

寄る。快けい。今宵の夜。延引。あて。然る。と。言。け。大將。経基。用
 是。その。城。中。小。間。者。の。入。り。あ。ま。と。味。方。の。割。符。を。改。め。と。設。所。と。へ
 觸り。と。けり。抑。り。城。小。筋。る。処。三。千。二。百。八。十。三。騎。雜。兵。人。丈。四。百。七。十。四。人。と。長。さ
 二。尺。八。寸。小。幅。五。寸。の。白。帛。の。割。符。と。指。各。一。澁。の上。第。小。船。さ。せ。味。方。の。澁
 符。と。せ。と。小。果。して。こ。と。持。持。さ。る。の。十。二。人。ぞ。在。あ。ける。即。こ。を。搦。り。捕。て。
 悪。く。奴。原。多。遠。く。小。首。と。言。り。け。り。を。経。基。と。を。止。め。あ。ひ。み。傳。り。張
 免。さ。せ。り。序。前。小。首。と。命。せ。り。人。は。味。方。の。陣。を。離。き。敵。の。城。へ。紛。れ。入。り。
 その。障。を。伺。ふ。患。と。や。い。ん。義。と。や。い。ん。元。之。戦。小。望。む。と。命。を。惜。ぎ。致。さ
 後。陣。の。場。を。悪。く。あり。ま。ま。動。切。と。い。ふ。あ。り。況。て。後。陣。の。痛。多。く。敵。地。小。足。と
 駐。り。尋。常。の。人。の。強。せん。や。その。驍。勇。の。稱。し。も。猶。餘。り。あり。と。宣。ひ。て。盡。を
 賜。り。引。出。物。を。給。り。忍。び。の。者。は。亦。さ。ら。蘇。生。る。心。地。と。漸。く。安。堵。の



大い怒り。憎き経基の軍界多に敵に難く遣へ速に追伐せんと其評議
 するに急ぎ。誰のいづくにや。この者も非ざるに將門自ら進發せんと
 その準備を急ぐ。この中箕田へ向えり。経基王の宗徒の郎従
 集り宜ふに借りて程數箇方の軍兵各粉骨の切として堅て控ま
 置り。敵數多し討取て既不用を解せり。合は等々勲績を悦び
 所あるに渠の中の大軍少く、其等と肩ともせず。這回將門自ら奮りて當
 城を圍む。身。然るに軍勢數千方との敵と知りて。勢の乏しさを
 どのも固小寡の衆に敵せず。千の味方の勝利あり。思ひに朝家
 對し私に存せざるん。深く討死し。衆下小忠を盡さんと思ふ。その連
 累の故に討死する。不便あり。勝を次第に落失し。御をさる及に
 と何れも不集會する。郎従一同に親と揃へて君に奉公の。

命の衆に進せり。此期ふ及び争ふ。君と搦て落し。方まをも出供し
 軍大切及びびる。討死し。年未の由恩で報下せん。とを以て
 恩ふ如く。大將経基の忠義金銀多。志を感。思ひに
 進み出。上意む。去る。退て恩按て理
 敵で伏せむ。一先とて。美濃尾張の間。津と居え
 り。詰て軍勢を聚り。再び朝敵に城を。とを以て
 日敵と討し。人。今。勇。謀
 りて。君子の道と。尾。箕田仕。加藤氏の約の如
 但し。敵味方の得失と。敵七ツの失あり。味方。の理得あり
 敵の大將の刀量の衆に勝。早業。と。士卒の勇。其小將

師の言ふ事を見下。且諸國の致し勝て心後り解解り。敵を侮る事
 二ツ多勢を憑で謀計を専めせむ。是已に武勇を驕て士卒を懐
 せ見四ツ。軍兵より大勢ありと。一時の権威を恃む。属従者の
 多き。義と重んずる者一人あり。是五ツ。諸軍大将の拙をたて知り。その下
 知と守りのあり。是六ツ。まゝ此頃當家へ對し。愈々拙をたて。その臆病
 のまゝ。醒を覺せし。まゝ味方の理をいふ。小勢をとも義を専め志を
 命と惜まば。是其七ツ。能大将の下知と守り。法令を背くる事。是其八ツ。又
 此間数日の軍。必打勝て。據て守る。是其九ツ。此の理を以て。七ツの失を敵
 小向を。徹摩あるを。以て去る。數日の蓄積。良兵糧尽ん。僅四五
 日の糧を。殘せり。故に。此の理を。大遠き謀め。あつて。然りと。一戦。ゆ
 及心を。退き。せん。其軍。變る。早業。せん。敵。害。ま。一。城。必。退。崩。し。を。據。め

のそ。ん。愛。お。熱。ト。計。計。表。計。由。い。人。々。知。何。小。思。ひ。あ。ん。と。の。人。の。諸。軍。等。一。密。小。
 會。最。と。同。け。り。け。り。の。准。備。致。さ。る。一。城。の。口。方。二。里。間。の。氏。を。悉。く。燒。
 拂。込。大。火。の。木。々。の。後。を。二。丈。許。の。雨。成。遠。り。その。あ。方。の。海。を。二。丈。後。に。
 一。丈。入。の。隄。に。場。その。外。堅。城。積。城。除。多。お。小。城。切。て。敵。の。口。成。さ。せ。と。攝。へ。
 一。の。木。戸。の。惣。城。の。高。擧。平。地。固。不。と。擧。へ。海。の。精。を。下。人。と。説。
 り。せ。騎。馬。の。名。の。十。騎。二。千。騎。旗。竿。と。し。を。一。擧。と。並。け。て。敵。の。陣。に。伺。
 て。打。く。お。んと。支。度。せ。其。勢。堂。々。と。進。む。城。小。由。と。教。え。お。り。か。て。
 大。將。基。陣。こ。下。知。彼。傳。え。法。令。嚴。小。示。て。敵。の。害。を。待。懸。と。り。小。
 同。月。十四。日。の。早。旦。小。將。門。自。り。八。方。餘。騎。成。率。と。箕。田。の。城。小。押。寄。せ。り。
 十。重。二。千。重。小。ら。ち。圍。三。方。二。里。が。その。間。の。敵。を。た。と。い。お。知。る。や。い。ま。は。
 地。成。を。厭。む。と。隠。れ。て。居。る。天。成。翔。る。翔。る。羽。を。休。め。小。便。り。其。日。の

身治経明とその性昔朋友の好まらざる。あはと屈竟のひありとて箇様と
と討て扱ふふ川然妻細の領兼一と一通の書翰を思ひ、経明が陣へ歸る
かゝる経明の書翰を扱てするの奮友の情と細く懐き、
珍しくも秘せ。不慮のあの軍出立あり。互ふ怨敵の思ひをさす事、懐小
是非あり次第あり。是れ就今の如く。長く當敵と食責あせらるる因縁
あの城糧多く。何箇月田まらた。穀る期あり。是れ今迄の罪科を
免さし命を仕けあふらる。首を伸て降人の思ひをさす事、懐小
中懐の火を懸け、くさる。そのを相圖ふ十方より。山勢を向りて内外より責
撃あり。六忽地の落城あり。及ぶ。その討界を起し。その経歴を對面
集と城中の思ひの者あり。と。後役方折あり。是れ僥倖あり。深くも
思慮さる。その謀針の意下ける。城中ありは澄し。う。と。みま望好とかなる

捨赤符と附て。相圖の刻限中ありし。陣に役所と小大とをさす。十八時の
声と合せあり。寄る八方より。押寄の城あり。我先と。透りあり。せ。後
入る。河とを敵との定より。後。同志討てするのさ。其間小味方
の入り或は五人七人。敵の中を刺て通り難く。田を道と。大将経基
同國の善知鳥坂まで落ちあり。その皆く相あり。此彼より集まる兵士。之而
除騎ふあり。小けり。あは推守興世の當國の素内者あり。ひ。亂軍の中
大将の落あり。ひ。とよく。知る。敵二千餘騎と七。あ。分ち。諸方へ分た。遊
蒐ふ。人々。遊遊の正多。敵の返と。返。合せて勝負せよ
と喚び。く。迎。え。れ。は。津。と。並。く。さ。て。返。す。あ。の。勢。ひ。も。思。ひ。入。り。大
將とも思ひ。を。焼。て。逃。入。とも。さ。り。け。る。其。後。の。遊。り。の。あ。る。落。味。を
集め。痲負と痛りて。経基の心用。小馬を打せ。あ。て。落。り。ひ。け。る

也 つひに 經基王 の 馬の 遠人 内 の 武界 あり 智勇 の 將 ら せん
 按 ず 將門 が 如 く 大敵 と ひと を 恐れ ぬ 小 を 侮 ら ず と 進退 その 機 を
 知 り て 克 べ ざる も あり の 戦 は 實 に 良將 あり あり の 國 を 守 る 事 に 勇 を 示 す
た 今 は 姓 千 有 人 の 清和 瓊林 一 枝 賜 源 姓 分 派 源 旗 幟 咸 尚 色
英 雄 と 譽 し たり の 事 あり
 白王 爪牙 永 奕 奕 と 名 を せ り 妙 人

平將門退治圖會二終

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 平將門, 退治, 圖會, 二終, and various smaller characters.)

